

黄河流域における小麦粉食文化とその特質

—山西省の面塑を事例に—

于 亜*

摘要

面塑は黄河流域において人間の食生活と密着しており、古くから食用・慶弔用・供え物用・贈答用と多岐にわたって用いられている。黄河流域の人々の文化は、長い年月とともに多様化し、面塑に精神の安らぎを求め、その芸術化をも追求してきた。本研究は、山西省の面塑を取り上げ、面塑に内包される山西省の生活文化およびその文化的特質を明らかにすることを目的とする。

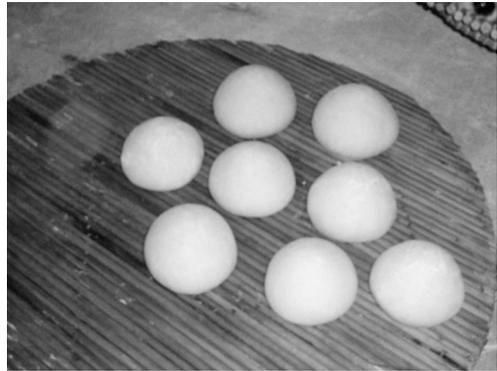
キーワード：面塑、小麦粉、食文化、黄河流域、山西省

I はじめに

1. 研究の背景と目的

黄河流域は1億あまりの人口が居住する乾燥地から半乾燥地の特性を有する地域である。農業を中心とするこの地域の食文化の様式はアジア全体の大きな関心事である。

小麦粉食文化を代表する饅頭¹⁾は黄河流域において古くから主食として用いられてきた(第1図)。饅頭には様々な種類があり、それらは風土や文化に適した伝統的な食文化の素材として用いられる。長い年月が経つ中で多様化し、饅頭は人々の精神性を象徴するものとなり、その美しさの中には数多くの魅力が詰まっている。黄河流域の人々は、饅頭を芸術の一環として追求し、面塑はその典型的な例のひとつである。



第1図 主食の饅頭(河津市にて)
12月24日筆者撮影

今日までに、面塑は黄河流域において食用から慶弔用や供え物用、贈答用と多岐にわたって用いられてきた。2008年6月に山西省の焙面娃娃・聞喜花饅・定襄面塑・新絳面塑が国家指定の「無形文化遺産」に認定された。2009年に中国における第1回民間面塑芸術祭りが陝西省文化

*大手前大学現代社会学部教授 E-mail: yuya@otemae.ac.jp

庁・陝西省英才組織委員会・咸陽市人民政府によって共同開催され、陝西・河南・河北・山東・山西・安徽・甘肅などの各省および地域から芸術家たちがやってきて面塑の芸術を披露した。このことは『咸陽日報』をはじめ、多くのメディアによって報道され、話題を呼んだ²⁾。さらに、山西省聞喜県の面塑は2010年上海国際博覧会に展示され、その存在感を示した³⁾。

現在、中国では数多くの博物館や美術館において、面塑文化に関する展示がみられる。現地調査(2011年8月9日～9月10日)によると、



第2図 天津民俗博物館に展示されている面塑
2011年9月1日筆者撮影

天津民俗博物館に常設展示される面塑の数は約10点(第2図)、北京市通州区にある面人湯芸術館に約80点があり、面塑に関連する資料は図書類・新聞記事・写真などが合わせて約60点におよぶ。また、2019年開館された山東省萊西市の膠東花饅饀文化博物館に約50点が展示されている⁴⁾。

これらの展示は、面塑文化が中国で特殊な地位にあることを物語っている。そこには改革開放以降の伝統食文化の復興や地域振興についての関心の高まりが大きく関連している。特に黄河流域においては、面塑が伝統食として大きな役割を担ったという点に注目しなければならないであろう。しかし、その大部分は収集に関する年代や地域、背景あるいは収集者などの情報が欠落している。このため、それぞれの展示物は面塑の形態的な特徴を紹介するに留まり、文化的・地域的特質や時代変化の特徴などを明示できていない。

また、中国の急激な経済発展に伴う農村部での出稼ぎによる若い世代の減少など生活様式の変容が進んでおり、伝統食文化そのものが失われつつある。したがって、今日、伝統食の展開を一定地域において解明することの意義はきわめて大きいと考える。

そこで、本研究は、山西省における面塑を中心とした小麦粉食品の実態に焦点を当て、地方誌・新聞記事・聞き取り、そして実地見聞によって得られた知見など様々な資料を駆使し、面塑に内包される山西省の生活文化およびその文化的特質を考察することを目的とする。

2. 本研究と関連する先行研究

伝統食である面塑は食文化や環境保護、保護の規定など数多くの要素と結びついている。このため中国では主に民族学や人類学、地域学、食品学、民俗学、言語学、歴史学などの多分野からの関心が寄せられている。ここでは本研究に関連する山西省のものを中心にみてみたい。

面塑の歴史について、段(2020)によると黄河中下流域の民間面塑は、食物であると同時に芸術的なものである。段はその起源を求めることは困難であるが、魏晋時代の仏教に関する祭祀習俗と関係があり、唐・宋の時代になると各地に面塑は普及していき、そのかたちも多様化・美化

されていったと指摘した。次に、唐（1999）は文献資料から面塑の起源と発展プロセスを考察し、時代ごとの面塑の変化を捉えた。唐はこうした全国各地の特徴的な面塑文化と民俗活動での使用を例示した。閻（2013）は地理学的視点から山西省南部と北部の地理的および文化的環境の比較を通じて、南部と北部の面塑芸術の特徴を比較し、両地域の特徴、造形芸術、生産技術の違いを明らかにした。

次に面塑に関する具体的な事例研究をいくつか確認してみたい。高（2012）は山西省夏県の結婚式に登場する面塑を検討し、その学術的・社会的役割を考察した。邢・李（2019）は最も伝統的な慣習を継承したものとして聞喜面塑を取り上げる一方で、地域の状況に応じて地元の味を作り出していることもまた指摘した。邢・李は聞喜の人々が面塑に土地への敬意と人生への期待・希望という意味を込めているとした。

さらに、1990年代以降、面塑文化研究に関する専門書も出版され、それには筆者の調査からは少なくとも7冊あることが確認されている。そのうち3冊は山西省の面塑文化に関する専門書であることが確認できた。特筆すべきは安新鮮著の『晋城民間面塑』である。そこには写真形式で動物、花、人物などをテーマにした山西省南部に位置する晋城市の面塑を260種類収録しており、民俗文化の研究に重要な情報をもたらしている。

日本において、丘（1989）、阿部（1993）、深尾・井口・栗原（2000）等は主に黄土高原を舞台とし、調査地の地理的環境及び村人の日常生活を具体的な例に挙げ、陝西省の北部における行事用の粉食品である「年饅」、「餛飩」、「餃子」、「糕」等に関する民俗習慣を紹介している。

従来の日本における面塑文化に関する研究は、筆者の知る限り、周（2016）と馬（2016）の2本のみである。両者とも陝西省の面塑文化に関する研究であり、前者は韓城市付近の党家村の面塑文化を事例とし、面塑は草の根の性格を帯びた民間の「芸術品」として位置付けている。後者は、文化人類学の視点から陝西省における工芸品の代表とされる伝統的な新粉細工を取り上げ、その新粉細工の歴史や製作方法、製作者の生活実態、生活の中での応用などを分析したものである。面塑は保存が難しく、資料が乏しいことから全体像がつかみにくい。また、小麦粉食品の中では、非日常的な存在であった点なども研究の少なさの背景にはあると考えられる。

3. 対象地域と研究方法

山西省は、156,700km²の面積を有しており、これは中国全土の総面積の1.63%を占める。人口は3481万3500（2022年）である。春秋時代に晋に属したことから晋という略称がある。黄河中流域の東岸、太行山脈の西部に位置し、元代は河東山西道と呼ばれた。現在の名称は明代に定められた。山西省は、中国古代文化の発祥地の一つであり、もっとも早期に開発された地域でもある。中国でも内陸部に位置することから、市場経済が中国全土に押し寄せる中であっても開発が遅れ、今なお伝統的な風俗や習慣が数多く残っている地域である。

本研究は、主に調査地域の選定、調査地域の地理的・歴史的特徴に関するデータの収集、地方志の取捨と整理、面塑の制作過程、面塑と関連する伝統文化に関する現地調査および観察を行

った。

現地調査に関して、本調査は2011年8月19日～9月10日、同年12月21日～2012年1月9日、2012年11月15日～11月23日の三回にわたって行った。現地調査では以下の内容に注目した。①中国博物館・天津民俗博物館・北京通州面塑館・山東省荷澤市牡丹区穆李村の面塑館の展示物を通して、中国国内面塑資料の実態を把握。②北京国家図書館・北京大学図書館・北京語言大学図書館・山東省図書館・済南市図書館・山西省図書館・河津市文化館・新絳県文化館・候馬市文化館・聞喜県文化館で、面塑に関するデータの収集。③38軒の民家と9軒の面塑工房を訪ね、24人の面塑職人への聞き取り調査と面塑の制作過程の観察を通して、物質文化の総合的理解を試みた。なお、本稿ではこれらの地域の調査結果を踏まえ、主に河津市龍門村、新絳県の面塑を取り上げることとする。この2つの地域では面塑文化が発達している上に興味深い面塑に関する実態が確認でき、小麦粉食文化としてより妥当な事例になると考えられる。他の地域における面塑については紙幅の関係からここでは割愛する。

II 文献史料からみる山西省面塑の種類と分布

黄河流域は、古代から黄河の氾濫による災害の絶えない地域であった。住民は安定した生活を祈願し、豚や羊などの動物を屠り、神に供える慣習があった。しかし、豚や羊の使用は実生活への経済的負担が大きいため、小麦粉でこねた饅頭の生地で作った豚や羊など、様々な製品を供え物として神に捧げるようになった。これが面塑文化の始まりにあたる⁵⁾。

山西省は主に小麦粉を中心とした食文化を持ち、異なる地域や様式の面塑を育んできた。面塑は普遍的で大衆化されており、大人や子供によく知られている民間の小麦粉芸術品である。そのほとんどは農村や町の女性たちによって作られている。主に上質の小麦粉を原料とし、こねる、形作る、蒸す、着色するといった過程を経ており、多くの場合、従来のモチーフからは誇張された表現がされるが、完成形は簡潔で質素なものとなり、地域の特徴が鮮明に表現されている。山西の面塑は、地理的に主に霍州面塑、忻州面塑、絳州（新絳）面塑、聞喜面塑、そして吕梁地域の嵐県面塑に分かれている。

1. 面塑とは

まず、本研究における面塑について確認しておきたい。潘・辛（1996）は「面塑は小麦粉に水をいれてこねた生地で作られた多様な彫像」⁶⁾と定義した。また、張（2001）は『中国民間美術大辞典』において「民間面塑は民間粉食芸術である。それらは、北部で小麦粉、トウモロコシ粉、大豆粉で作られた「面花」「花饅」「礼饅」「面羊」などを総称して面塑という」としている⁷⁾。郭（2016）は「良質な小麦粉を使用し、練り、成形、蒸し、着色の作業を経て作られたもの」⁸⁾と説明している。

本研究の対象地域における地方誌でもそれぞれ面塑の記録がみられる。『河津志』には「小麦

粉を用いてトラや猫、ウサギ、豚、牛などの動物の形を作る手工芸品で、通常、春節や清明節、中秋節などのお祭りの際に親戚への贈り物として贈られる。また、大きな饅頭を土台にして、その上に花や鳥、魚や虫などの形を作り、色を付けて、結婚式や葬儀、誕生日などの贈り物として利用されることもある⁹⁾と記している（第3図）。『新絳志』には「宋代から新絳において豚・羊の代わりに小麦粉で手作した豚・羊の面塑を供え、祭祀を行った。以来、民間でこの習慣は広がり、今日まで継承されている。人々は小麦粉で動物・植物などの様々な様式の面塑を製作し祭祀・行事以外に親戚・友人などにおける日常の交流にも贈答品として使用している。新絳において面塑は60種類以上に達している¹⁰⁾と記録されている。さらに山西省『代県志』には「面塑は、小麦粉の生地を使って人物、花鳥、動物などを制作する芸術品で、装飾品や贈り物として使われ、同時に食べることもできる¹¹⁾と記されている。



第3図 面塑の作製風景
（『河津市志』より）

面塑は中国の伝統工芸の一つで、主要な素材として小麦粉が用いられる。巧みな技術によって人物や動物などを作り上げる伝統的な小麦粉製品であるといえる。面塑はリアルな造形、製作の簡易さ、そして乾燥や変形がしにくいことが特徴である。以上から、本研究における面塑について、小麦粉を発酵させ、リアルな造形をもち、容易に手作りでき、それを蒸して作った伝統的な食べ物であり、主に年中行事や通過儀礼に用いられる小麦粉製品とする。なお、面塑は山西方言ではまた「饅」や「饅饅」などと呼ばれる。このように地域によって呼び方がさまざまであるが、本稿では面塑で統一する。

2. 地方誌からみた面塑の特色

地方誌とはその地域に関する様々な内容を記したものである。筆者が取り上げた面塑を記録している地方誌には、1986年に書目文献出版社により出版された『中国地方志民俗資料彙編』がある。同書は華北・東北・西北・西南・中南・華東の6地域について6巻から構成される。本稿が利用するのはその華北巻「山西省」の部分である。

歴史的に面塑そのものについて記述し、記録した資料は少ない。しかし、多数の地方誌、とくに清代と民国期の記録からは、若干の内容をうかがい知ることができる。それもあくまで民俗的活動の一環としての内容であり、体系的に面塑文化が記述されているわけではない。こうした資料からは、古くから伝承されてきた面塑が民俗的な活動として、どのように位置づけられるかを検証することができ、その点からみるとこの資料は非常に有用といえる。当然ながら、地方誌にはその他の欠点もある。それはすべての県に地方誌があるとはかぎらないことである。地方誌があっても面塑に関する習俗が記載されていない点などの制約もある。地方誌の記載は信憑性が高

く、貴重といえるが、すべての地域の面塑の事情を把握することは困難である。そこで、このような資料的制約を補うために、その他の民俗に関する資料や民族誌、そして現地調査が有効になってくる。

では、地方誌で示された面塑はどのようなものであったか。以下では、いくつかの項目に整理して、面塑の特色や利用状況を概観する。

第1表において地方誌に記述された面塑の情報を整理した。この表の内容を要約すると次のよ

第1表 地方誌にみる面塑の意味

時代	No.	年代		地域 市・県	史料名	巻	面塑名称	行事	時期	記事	
		年号	西暦								
清代	1	康熙 25 年	1686	臨晋県	臨晋県志	10	重陽糕	重陽節	9月9日	小麦粉で作った生地に棗を挟み込み、蒸したものを「重陽糕」という。親戚同士に贈る。	
	2	康熙 26 年	1687	陽城県	陽城県志	8	棗糕	重陽節	9月9日	家で棗糕を作る。	
	3	康熙 40 年	1701	永寧州	永寧州志	8	花糕	重陽節	9月9日	花糕を作る。	
	4	康熙 51 年	1712	徐溝県	徐溝県志	4	花糕	重陽節	9月9日	菊酒を飲み、花糕を作って、贈る。	
	5	康熙 57 年	1718	臨県	臨県志	8	糕	重陽節	9月9日	糕を食す。	
	6	康熙 57 年	1718	臨汾県	臨汾県志	8	面魚	元宵	1月15日	小麦粉で面魚を蒸す。	
	7	康熙 58 年	1719	汾陽県	汾陽県志	8	花糕	重陽節	9月9日	花糕を作り、親戚、友人を招き、菊を鑑賞する。	
	8	雍正 5 年	1727	定襄県	定襄県志	8	花糕	重陽節	9月9日	花糕を蒸す。	
	9	雍正 8 年	1730	石楼県	石楼県志	8	糕	重陽節	9月9日	糕を食す。	
	10	雍正 8 年	1730	沁源県	沁源県志	8	花糕	重陽節	9月9日	菊酒を醸し、花糕を作って、娘を迎える。	
	11	雍正 13 年	1735	朔州	朔州志	12	面人	七夕	7月7日	面人を作り、高さは1尺ほど、暮和楽という。	
	12	乾隆元年	1736	平陽府	平陽府志	36	面魚	元宵	1月15日	小麦粉で面魚を蒸す。	
	13	乾隆 19 年	1754	広霊県	広霊県志	10	棗糕	重陽節	9月9日	棗糕・菊酒を贈る。	
	14	乾隆 21 年	1756	崞県	崞県志	8	花糕	重陽節	9月9日	茱萸酒を飲み、花糕を食す。	
	15	乾隆 28 年	1763	渾源州	渾源州志	10	棗糕	重陽節	9月9日	棗糕を贈り、酒を造る。	
	16	乾隆 35 年	1770	潞安府	潞安府志	40	面羊	七夕	7月15日	小麦粉で羊を作り、女子に贈る。	
	17	乾隆 35 年	1770	孝義県	孝義県志	20	糕	添倉	1月20日	糕を蒸し、神を祭る。	
	18	乾隆 43 年	1778	長子県	長子県志	20	花糕	重陽節	9月9日	菊酒を醸し、花糕を作って、贈る。	
	19	乾隆 47 年	1782	大同府	大同府志	33	面人	中元節	7月15日	面人を作り、子供に贈る。	
	20	嘉慶 21 年	1816	長子県	長子県志	21	面羊	七夕	7月15日	旧俗には羊を屠り、神を祭って、親戚に配る。貧者は小麦粉で羊の形の「面羊」を作り、祭る。今は面羊を作り、祭る。	
	21	道光 7 年	1827	趙城県	趙城県志	37	棗糕	祝節	9月9日	棗糕を作り、女子に贈る。	
	22	道光 10 年	1830	大同県	大同県志	20	花糕	重陽節	9月9日	面餅（小麦粉で作ったナン）を作り、花糕という。	
	23	同治 11 年	1872	河曲県	河曲県志	11	面人	中元節	7月15日	民間において、小麦粉の生地で造形化され、蒸した人形を親戚に贈る。面人を贈る習慣は今も続いている。	
	24	同治 13 年	1874	陽城県	陽城県志	18	棗糕	龍抬頭日	2月2日	朝、茶粥・棗糕を食す。	
	25	光緒 6 年	1880	左雲県	左雲県志稿	10	面羊・面人	中元節	7月15日	小麦粉の生地で造形化され、蒸した羊や嬰兒を面羊・面人と呼ばれ、親戚の子供に贈る。	
	26	光緒 6 年	1880	絳県	絳県志	14	面餅	祀竈神	12月23日	小麦粉で面餅を作り、神を祭る。	
	27	光緒 7 年	1881	清源県	清源県志	18	棗糕	重陽節	9月9日	棗糕を食す。	
	28	光緒 7 年	1881	榆社県	榆社県志	7	棗糕	重陽節	9月9日	酒を飲み、婚姻している両家は互いに棗糕を贈る。	
	29	光緒 7 年	1881	翼城県	翼城県志	18	面鼠	穀谷	1月15日	小麦粉で面鼠を蒸す。	
	30	光緒 8 年	1882	平遙県	平遙県志	12	花糕	重陽節	9月9日	花糕を蒸し、天地を祭る。その花糕を婿に贈る。	
	31	光緒 8 年	1882	祁県	祁県志	16	花糕	重陽節	9月9日	菊酒を醸し、花糕を作って、贈る。	
	32	光緒 8 年	1882	平定県	平定直隸州志	16	花糕面餅	結納家祭	婚礼葬儀		面餅を作り、仲人に贈る。裕福な家庭は豚の頭、鶏、魚を使い、魚の代わりに小麦粉を使用し、これで3つの生け費とした。貧しい家庭は面餅（小麦粉で作ったナン）を20枚用意する。蒸炉食という。
	33	光緒 9 年	1883	文水県	文水県志	12	花糕	重陽節	9月9日	菊酒を醸し、花糕を作って、贈る。	
	34	光緒 10 年	1884	崑崙州	崑崙州志	12	棗糕	重陽節	9月9日	菊酒を飲み、棗糕を食す。	
	35	光緒 10 年	1884	潞城県	潞城県志	4	面羊	七夕	7月15日	面羊を作り、女子に贈る。	
	36	光緒 12 年	1886	定襄県	定襄県補志	12	面羊・面豚	中元節	7月15日	墓参りに小麦粉の生地で造形化され、蒸した羊や豚を面羊・面豚と呼ばれ、お墓に供える。	

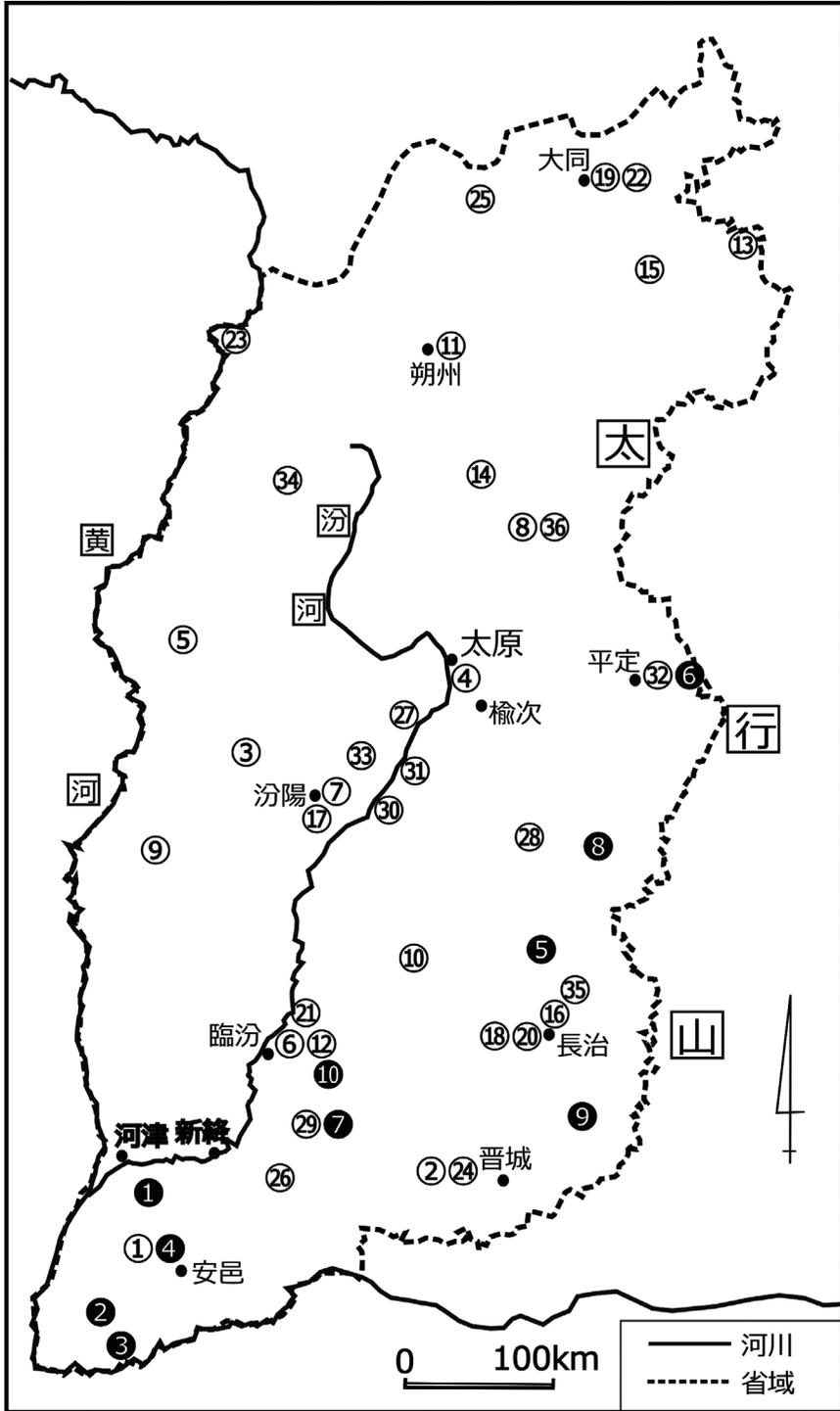
黄河流域における小麦粉食文化とその特質（干）

民国時期	1	民国6年	1917	万泉県	万泉県志	8	子推	清明節	3月	小麦粉で大兜葱の形にしたものを蒸して、「子推」という。
	2	民国9年	1920	虞郷県	虞郷県新志	10	棗糕	重陽節	9月9日	棗糕を蒸し、新婚の娘に贈る。
	3	民国12年	1923	芮城県	芮城県志	16	棗糕	重陽節	9月9日	棗糕を蒸す。
	4	民国12年	1923	臨晋県	臨晋県志	16	節節高	正月	1月1日	小麦粉で作った生地に、棗が挿し込んであったり、塔の形に棗が貼りつけられたりして「節節高」という。
							送饅	重陽節	9月9日	棗糕を食し、新婚の娘に贈る。
	5	民国17年	1928	襄垣県	襄垣県志	8	糕	重陽節	9月9日	糕を作り、女子に贈る。
	6	民国17年	1928	平定直隸州	平定直隸州志	16		中元節	7月15日	小麦粉の生地で傘のようなものを作り、嫁の実家に贈る。
							巧食	七夕	7月7日	小麦粉の生地で傘のようなもの作り、むし遊ぶ。これは「巧食」という。
	7	民国18年	1929	翼城県	翼城県志	38	坐節	正月	1月1日	寝室に祖先の牌位を祭る場所を設定する。そこに羊や豚、果物、小麦粉食品を供える。小麦粉食品は小麦粉を練って作った桃の形、石榴の形にしたもので積み上げた楕円状の面塑を「坐節」、宝珠を取りまく2頭の龍で構成された「双龍戲珠」式、九つの鳳凰が日がよく当たる場所で舞うという「九鳳朝陽」式、牡丹の花の中で一對の鳳凰が載れる「鳳凰戲牡丹」式、その隙間には、棗が挿し込んであったり、重ねられていたりして、「棗山」という。また、楕円状の饅頭に棗が貼りつけられたりして「棗糕」、塔の形に棗が貼りつけられたりして「節節高」という。
							棗山			
棗糕										
節節高										
8	民国18年	1929	遼州	遼州志	8	面食	実子日	1月1日	小麦粉の生地で造形化された麦穂形の食品であり、面食という。	
9	民国22年	1932	凌川県	凌川県志	10	牲	七夕	7月15日	小麦粉で牲（牛・羊・豚）を作り、祀る。	
10	民国24年	1935	浮山県	浮山県志	24	面蛾	鬧蛾兒	1月15日	小麦粉で面蛾を蒸し、神を祭る。	

出典：丁 世良・趙 放主編『中国地方志民俗資料編 華北巻』書目文獻出版社、1989、541～722頁

うになる。まず、分布状況である。第1表から、清代において1府3州21県、民国期においては2州8県の地方誌に面塑習俗が記録されていた。第4図は、第1表をもとに作成したものである。これらの面塑習俗は山西省に広く分布しているが、主に山西省南部、特に汾河の周辺地域に集中していることがわかる。その理由として、南部地域は山西省の重要な小麦の産地であったことが挙げられる。『聞喜県誌』には「麦は非常に乾燥に強く、土壌にも適しており、川や丘陵の斜面、一望の中に麦畑が広がっている。常食品とされ、土地のうちの約8割が麦畑を占める」¹²⁾と記されている。とくに北垣（北塬）は、聞喜県の質の高い小麦の生産地域である。この地域で産出される小麦は他の場所よりも成長期が数十日長く、成長サイクルが長く、粒は大きく満々としており、その品質が優れている。また、民国期の臨汾では「農産物の中で麦がトップに位置した」¹³⁾とある。襄陵では「この地域では小麦栽培が急務とされている」¹⁴⁾とあり、臨晋では「農地のほぼ70%が麦の栽培に使われていた」¹⁵⁾とある。万泉では「地元の農家は主に麦を栽培し、土地の性質にも合っている」¹⁶⁾とある。小麦は山西省南部の土壌に非常に適していたと考えられる。とくに新絳県では「小麦は皮が薄く、粉状にしやすい、地元の主要な食材となっており、そのため生産量も非常に多い」¹⁷⁾と記されている。これらの記述からは、南部地域の大部分の土壌で小麦が栽培・収穫されていたことがわかる。こうした小麦の生産によって、面塑の文化や技術も発展していったことが示唆される。

次に呼称の多様性である。第1表に示しているように、面塑の呼び方はさまざまであり、その語源も一定のものではない。さらに面塑の呼び方は地域方言との関連もみられる。第1表によると、面塑の呼び名は、大きく2種類に分けることができる。その一つは「花糕」「棗糕」という



第4図 山西省地方志にみられる面塑の分布

注) 各番号は第1表と対照する。白丸は清代、黒丸は民国期を示す。(丁 世良・趙 放 主編 (1989)『中国地方志民俗資料匯編 華北卷』書目文獻出版社、より作成)

「糕」を用いるものである。二つ目に「面人」「面羊」「面魚」という「面」を用いるものである。「糕」について、1987年に出版された『簡明中国烹飪辞典』では、「米の粉・小麦粉を主材料として、水・砂糖・棗などを加え、作った塊状の食品」¹⁸⁾と記している。「糕」の発音は「高」と似ており、年ごとに一步一步高く昇っていくことを表している。また「面」には、小麦粉の意味もある。「面人」「面羊」「面魚」という呼び名は「小麦粉」という素材を強調していると考えられる。この2種類の呼び方が当時、それぞれの地域で広く使用されていたと推定できる。現地調査では、その地域に伝わる独特な呼び名が現在でも用いられている事実が確認できた。例えば、南部の霍州地域では「羊羔儿饅」, 河津・聞喜・候馬周辺では「花饅」という呼び名が依然として広くみられる。

以上のように、各地域にみられる呼び名は山西省という空間的な広がり、小麦粉と人々との関わりの中で多様化していったのであろう。長らく山西の農村を支えてきた農耕の歴史は、麦作と深く関連し、その中で「面人」「面羊」「面魚」と呼ばれるものが維持されてきた。これらは地域の歴史を伝える上で重要な要素であると考えられる。

第三は面塑の利用形態である。第4図をみると、同じ山西省の中でも、北部と南部では古くから面塑の利用形態が異なることが分かる。例えば、南部に広く展開している面塑習俗は旧暦の9月9日の重陽節に登場する面塑である。第1表の記事によると、この重陽節は、もともと3つの要素から構成されていた。第一は棗糕を作り、それを神々に捧げ、家族の健康と無病息災、そして子孫繁栄を祈る祈願の要素である（第5図）。第二は菊花で醸した酒を飲み、棗糕を食べ、不老長寿を願う祈願の要素である。第三には面塑を作り、それを贈答品として娘に贈ることである。これは成長や進歩、昇進の象徴となっている。重陽節の習俗について、明代の劉侗と于奕正による『帝京景物略』には次のように記されている。「九月九日……面餅に枣と栗を付けて、きれいな模様ができ、これを花糕と言う。……親の家では必ず娘を迎え、花糕と一緒に食べる」¹⁹⁾とある。明代の北京の花糕と清代の山西省の棗糕は、やや違いがあるが、重要な催事である重陽節において、神霊に家族の健康と無病息災、子孫繁栄、不老長寿を占い祈願する儀式が行われ、そのときに面塑が使用されることは、行事食としての特徴が強く表れていることに違いないだろう。

南部に対して、北部では中元節に面塑の登場が多く見られる（第4図）。実際に民間においては、面塑はどのように評価されてきたのであろうか。筆者の現地調査から、新絳県在住の五台县出身の張氏は中元節に面塑が登場する理由の一つを次のように語った。

「7月15日の中元節に花饅を作り、祖先を祭ることは、私たちの故郷で一年を通して最も盛大な行事です。私の故郷は山西省の上五台に位置し、そこは標高が高く、寒冷な気候です。一年中、緑はめったに見られません。小麦粉は、私たち



第5図 自家製の棗糕（河津市にて）12月26日筆者撮影

の地域では貴重なもので、一年中、食卓にはほとんど登場しません。旧暦の7月15日が訪れると、節約家の村人たちは一年間ためた小麦粉を取り出し、花饅を作って祖先に捧げます。これは、先祖から祝福を受けて家族の繁栄を願い、代々にわたって続くよう祈る儀式です。』²⁰⁾

この語りから小麦粉は貴重な食料であり、日常的に利用するものではなく、行事の食材として、大切に使用していたことがわかる。すなわち、小麦粉は食物の素材であるとともに、精神的な面においても人々にとって大切な存在であり続けてきたといえる。

旧暦の7月15日の中元節は祖先を祭り、土地を祀る祭日である。7月は瑞祥の月であり、親孝行の月でもある。さらに7月の半ばは民間において初秋が祝われ、豊作に感謝し、大地に謝意を表す。この月はいくつかの農作物が熟す時期でもある。しかし、北部は「天氣が寒冷で土地が不毛である」²¹⁾とされる。この自然条件は、小麦の成長には適しておらず、主要作物としては、高粱やトウモロコシなどの生産性の高いものが栽培されている。そのため、小麦粉は手に入れにくいと考えられる。北部の中元節では、「花饅」に必要な小麦の栽培と収穫に対する期待も表されていると考えられる。

第四に贈答品である。山西省の農村社会では、面塑は贈答品として人間関係を維持し、構築するための道具とされている。面塑の贈り主は主に血縁関係のある親戚であり、子供の祖母や叔父、新郎の叔母や伯母、亡くなった人の娘や姻戚などである。現在も同様に面塑は主に親戚の血縁の範囲内を伝えているのである。

Ⅲ 面塑工房の特性

上述した各家庭の祭日に登場する面塑以外にも、より専門的な面塑も確認できる。ここでは面塑職人の事例をみてみたい。面塑職人は労働力を提供することで人間関係を維持し、構築している。最初は主に親戚の助け合いから始まり、自分の技術が熟練すると、近隣の友人や家庭の手伝いに行く。面塑職人の名声は村々の間で広がり、彼女たちは自身の技術を伴って近くの村々を忙しく行き来している。面塑職人が手伝う人間関係の範囲は次第に広がり、親戚の範囲から地域の範囲まで広がっていく。新中国初期と20世紀70、80年代初期には、一般の人々は面塑の制作で収入を得ていなかった。むしろ、互いに助け合う状況が形成され、面塑の制作は個々の人が集団活動に参加する手段となった。重要な儀式や祭りでは、個々の人が本家に招かれ、面塑の制作を手伝い、自分の技術を他人に披露し、村民からの認可と称賛を得るための機会となった。

しかし、工業化・都市化が進む中で、伝統的な面塑は人びとの日常的・非日常的生活から疎遠なものとなっていった。今日の山西省における面塑に従事する職人を取り囲む状況はどのようなものであろうか。そこで、本章では、聴き取り調査を通じて、その面塑工房・面塑職人の所在や技術の伝承などの実態を取り上げることとした。

1. 対象地域について

第4図に示しているように、調査では山西省内の河津市龍門村と新絳県において、面塑に関わる工房と職人を尋ねた。理由は以下の2点である。まず、地理的環境と歴史的背景である。河津市龍門村は、汾河と黄河との合流する地点の近くに位置し、西側に黄河が流れ、北側に吕梁山脉がそびえている。この村には870世帯、約3,600人（2012年）が住んでおり、12.8km²の面積を有する。1990年代末まで、河津市の龍門村は貧しい山村であったが、現在は「山西最美旅游村」として知られている。次に汾河の下流域に位置している新絳県は、地理的に優位な地点に位置し、「水陸の玄関口」とも称され、古くから商業の中心地として栄え、伝統的な手工業も発展している。両地域は、温暖な気候が特徴であり、夏は暑く、雨が多い。年間平均気温は10～14℃、年間降水量は500～650mmである。主な農作物は綿花と小麦、エンドウ豆、大麦、キビ、トウモロコシ、高粱、落花生、ジャガイモなどである。両対象ともに山西省の重要な小麦の産地である聞喜県の周辺部に立地しており、この地域に暮らす人々も小麦粉を主食とする。また、面塑を中心とした民俗行事に対する人々の意識が高い地域でもある。地方誌に面塑に関する記述があることから調査対象として妥当であるといえる。

2. 面塑工房の様相

1) 「民間芸術花饅」工房

龍門村北部に位置する「民間芸術花饅」工房（第5, 6, 7図）は、住宅兼工房であり、店主は周氏である。周氏は1964年に生れ、15歳当時の1979年から祖母の指導の下で面塑技術を学び始めた。技術を習得して一人前になった20歳ごろから作品を作りだした。2000年には「民間芸術花饅」工房を開設し、農業をしながら面塑職人となった。作品は主に注文されたものが多く、その様式は多様である。彼女が制作した婚約の際に登場する混沌饅（第8図）は龍門村を象徴する面塑であり、高く評価されている。しかしながら、その後継者はおらず、混沌饅の伝承は危うい状態にある。



第6図 周氏の「民間芸術花饅」工房兼自宅
12月26日筆者撮影



第7図 周氏による面塑の制作
12月26日筆者撮影

2) 花饅店

龍門村南部に位置する花饅店（第9図）は、住宅兼工房であり、店主のA氏によって経営されている。A氏は1967年に河津県に生まれ、15歳のとき祖母の指導の下で面塑技術を学び始めた。19歳で一人前となり、それ以後、祖母のところでの14年間にわたる実務経験を通して、面塑技術の修練を重ねた。33歳になった2000年に独立し、花饅店を立ち上げた。現在は、一人で工房を営んでいる。

3) 手工花饅店

新絳県龍興鎮にある手工花饅店（第10, 11図）は、住宅兼工房であり、店主のB氏によって経営されている。B氏は1970年に新絳県に生まれ、祖母も母も花饅職人であり、彼女自身も子供の頃から面塑技術を学び始めた。31歳になった1991年に手工花饅店を立ち上げた。現在は、長男の嫁であるC氏と二人で工房を営んでいる。C氏はB氏のもとで伝統的な面塑技術を学び、伝統様式による面塑以外にも、時代の変遷に応じた変化を志向し、独自の様式の確立を模索してきた。今日では、C氏は伝統的な面塑のみならず、アニメなどをモチーフにした立体感のある面塑を創作し、現代的な芸術のなかに伝統的な面塑の作風を維持する挑戦を続けている。このB氏の面塑技術を伝承するため、長男の嫁であるC氏が義理の母であるB氏の



第8図 周氏が製作した混沌饅
12月26日筆者撮影



第9図 A氏の花饅店兼自宅
12月27日筆者撮影



第10図 店主のB氏(左)と長男の嫁であるC氏
12月28日筆者撮影



第11図 二人で制作した龍
12月28日筆者撮影

下で日々研鑽を積んでいる。

4) 文華面塑芸術研習所

新絳県の信合小区に位置する「文華面塑研究所」（第 12, 13 図）は、住宅兼工房であり、所長の王文華氏によって開設された。王氏の曾祖母は面塑製作の名手で、年中行事の際、村の女性が学びに来ることもあった。その後、王文華氏の祖母が 2 代目、母が 3 代目を継承した。4 代目の王文華氏は幼い頃から母親とともに花饅頭を作っており、彼女は若い頃から生地造りに優れていた。その名は周辺地域に知れ渡っていたとされる。王文華氏は 2009 年に山西省文化庁から「新絳面塑」の代表的传承人に任命された。73 歳になった 2012 年 4 月に文華面塑研習所を開設した。この非物質文化遺産の面塑技術を継承するために、王文華氏の娘である支恵雲は母親の影響を受け、面塑の制作に取り組んでいる。王文華氏が面塑を作る際にはいつも隣で学び、7 歳の頃には基本的な制作技法を会得し、簡単な面塑を作ることができた。今日、家族の技術の継承者として、支恵雲は研究を続けている。小麦粉の選択、生地の調整、発酵、形作り、蒸し器での加熱、着色など各工程について研究し、繰り返し試行錯誤している。

各地域からみると、簡易なタイプ（第 14, 15 図）の面塑は自家で作るものが多い。一方、豪



第 12 図 文華面塑研究所兼自宅
所長の王氏（左）と長女の支氏
12月29日筆者撮影



第 13 図 文華面塑研究所所長の
王氏作品「虎と葡萄」
12月29日筆者撮影



第 14 図 自家製の棗糕（河津市にて）
12月27日筆者撮影



第 15 図 自家製の龍型の棗糕（河津市にて）
12月26日筆者撮影

華なタイプ（第16図）の面塑の場合、職人によって製作されることが多い。そして、その職人のほとんどは女性である。当該地域では、彼女たちが自宅で家事をしながら小規模な「手工饅」店を営むことがみられる。一つの村にはそれぞれ2,3軒の店がみられる。その地域の生活様式と深く関係しており、黄河流域の郷土文化や民間芸術を小麦粉の生地によって表現している。



第16図 職人製作した面塑（新絳県にて）
12月30日筆者撮影

上述のように、面塑工房の様相について、河津市龍門村と新絳県から簡単に捉えた。河津市龍門村と新絳県では、今日もなお、周氏や王氏などの面塑職人が工房を構えている。ここでは今日でも伝統的慣習によって、その作風は師匠と弟子という関係性において継承される。1軒の工房は、おおむね師匠1人と1~2人の弟子によって構成される。面塑の技術伝承は、原則的に母娘間の関係性によって成り立っており、このような閉鎖的な関係のなかで継承されてきた。

IV 面塑の特質

面塑について、これまでの調査で収集した資料に基づき、モチーフ、色、道具、制作過程と職人の5つの視点からその特徴を検討してみたい。

まず、モチーフからみた特徴について、面塑は年中行事や通過儀礼に用いられる小麦粉製品として、それぞれ象徴的な意味が含まれている。第2表は面塑をモチーフごとに分類したものである。第2表から、面塑職人は用途に応じてさらに細かく分類していることがわかる。面塑はモチーフによって、7種類に分類され、計35種類が制作されている。4種類の現実に存在する動物、7種類の植物、6種類の家畜など多様なモチーフがある。かつて物資が充足していなかった時代には、動物や植物の形をした面塑は重要であった。これらは祈りをささげる人々にとって、神聖な祭祀の儀式で使用される道具であった。こうした面塑には花や鳥、魚、野菜、果物、動物などの模様を施すことで、先祖の崇拜、年長者への祝福、新婚夫婦への祝福、そして素晴らしい生活についての憧れが表現されている。

次に色について、面塑にはさまざまな模様と色が施されるが、その本体は淡いクリーム色から形成されている。当該地域の面塑は特に小麦粉にこだわり、本格的に作る場合、南部で栽培された北垣の小麦粉が必要である。聞喜県の北垣地区は小麦の品質に優れている。当地の小麦粉は粒が大きく、細かく、一切の漂白が施されていないため、自然な淡いクリーム色をしている。この粒子の細かさは加工しやすさをもたらし、幅広く利用されている。

道具について、かつて当該地域において約90%の家庭が面塑を制作していた。それだけ普及

黄河流域における小麦粉食文化とその特質（干）

第2表 面塑のモチーフとその特徴・意味

分類	番号	モチーフ	特徴・意味	用途
鳥	1	燕	燕の雌雄が共に飛翔する際に互いに連れ添うように、男女が愛し合い、幸せになる意味がある。	婚礼、結婚記念日、お正月 葬儀、墓参り
	2	鴛鴦	夫婦の仲が良いという縁起の良い意味が含まれている。	婚礼、結婚記念日
	3	鳳凰	伝統的な吉祥の寓意が込められてきた。	婚礼
	4	鶴	長寿、吉祥な意味が含まれている。	誕生日
	5	鶴	春と新年の喜びを伝えるなどの吉祥寓意が与えられた。	春と新年
家禽・家畜	6	魚	「余」と同じ発音であり、生活が年々豊かであることを表している。	お正月
	7	羊	「祥」に類似した音であり、「吉祥」の意味があり、縁起の良い意味もある。	お正月などの年中行事
	8	牛	農耕生活に欠かせない家畜で、中国文化において牛が勤勉の象徴である。	お正月などの年中行事
	9	兎	多産な動物のため、縁起の良いモチーフである。	中秋節
	10	鶏	「吉」と同じ発音で、「吉祥」の意味がある。辟邪、幸運の象徴とする。	お正月などの年中行事
	11	豚	農耕生活に欠かせない家畜で、食べることができてお金になることを意味し、経済的な収入を象徴している。	お正月などの年中行事
文字	12	囍	“囍”は、元々2つの喜びの出来事が同時に起こることを指す言葉で、主に結婚式で使用され、双方の喜びを表現する。	婚礼
	13	福	元来、幸運や富貴の意味であった。時代の進展とともに、出産順調、子孫繁栄、婚姻円満などの吉祥寓意を包含するようになった。	お正月などの年中行事
	14	禄	富貴、幸せという意味がある。	お正月などの年中行事
	15	寿	老いるまでの長い年月を意味し、長寿を願う。	誕生日
	16	連年有余	年々繁栄があるという願いが込められている。	お正月
瑞獣	17	豊	農産物の収穫、五穀豊穰の意味が包含されている。	お正月などの年中行事
	18	獅子	凶暴で威厳があり、長らく邪悪を避け、権威の象徴として存在し、人々に平安、安らぎをもたらす幸運のお守りとされている。	お正月などの年中行事
	19	虎	凶暴で威厳があり、長らく邪悪を避け、権威の象徴として存在し、人々に平安、安らぎをもたらす幸運のお守りとされている。	端午節、祖先を祀る。
	20	龍	民間信仰に登場する代表的な神獣であり、人々に平安、安らぎをもたらす幸運のお守りとされている。	お正月
	21	麒麟	人々に平安、安らぎをもたらす幸運のお守りとされている。	お正月などの年中行事
	22	孔雀	繁栄と幸福を象徴している。	婚礼
劇曲	23	鹿	温順な動物として親しまれてきた。また、鹿は「禄」と同音であり、富貴、幸せという意味があるとされてきた。	お正月などの年中行事
	24	白蛇伝	「白蛇伝」の内容は、男女の主人公がさまざまな困難を経験し、多くの困難を乗り越え、最終的に愛し合う人々が結ばれる愛の物語を語っている。	清明節に祖先を祀る。 新居祝い。
	25	西廂記	美しい愛の物語を歌い、堅忍不拔な愛情を称賛する象徴となっている。	婚礼ならびに婚約式
植物	26	牡丹	幸福な生活と新しい生命を迎える美しい象徴が含まれている。	婚礼、お正月
	27	梅	梅の花の五弁が快樂・幸福・長寿・順調・平和という意味である。	お正月
	28	葡萄	多産・豊饒の象徴として、神聖な果物とされてきた。	お正月、七夕、出産
	29	蓮	毎年豊かな生活が続いていくようにという願いが込められた。	お正月
	30	石榴	多くの子孫と幸福を意味する。	お正月、七夕、出産
	31	桃	子孫繁栄、不老長寿を与える果物として親しまれている。	誕生日
人体	32	棗	枣という言葉は「早」に音が通じ、子作りを遅れないように行うことを意味する。	婚礼、お正月
	33	乳房	子孫繁栄の縁起の意味がある。	出産
	34	女性生殖器	産後女性の身体の回復を祈る。	出産
	35	男性生殖器	健康を祈る。	清明節に祖先を祀る

出典：山西省委党史研究院・山西省地方志研究院編纂『山西省通志 民俗方言志』中華書局 1997
聞き取り調査による



第17図 文華面塑研究所の伝承関係図
(聞き取り調査による)

した要因のひとつに、面塑の加工には特別な道具を必要としなかったことが挙げられる。面塑が完成するまでには、捏ねる・抓む・捻る・切る・潰す・編む・貼る・色付けする・型にはめる・蒸すなどのいくつかの作業プロセスがある。製作には様々な手法があり、手や指での造形だけでなく、日常生活で用いる生活用具も時に用いられる。たとえば、麵棒や鉢、櫛、竹串、切り刃、箸、ピンセット、びんの蓋、毛筆などである。また、棗、小麦、小豆なども巧みに利用されている。このように、面塑の製作には特別な道具は不要である。むしろ、日常生活でよく使われる道具がみられる。道具は身の回りにある日常生活の用品から選ばれ、こうしたことは生活の実態に合わせて生み出された知恵と工夫といえる。

面塑の製作について、これは4つの工程に分類できる。最初に良質な小麦粉を選ぶことであり、引き続き小麦粉生地を発酵させることである。次に、発酵した生地を形にはめる彫塑である。そして、蒸すという調理である。最後に、蒸した彫塑に描画や彩色を施す。このような製作プロセスがみられる。

最後に職人からみた特徴をみてみたい(第17図)。『河津志』には面塑製作には「一般的に、田舎の家庭の女性がこの技術を習得する」²²⁾と記されている。河津市文化館の杜氏はまた「花饅は明清時代に盛行し、既に1000年以上の歴史があります。母親たちによって生み出されたもので、「母の芸術」とも呼ばれます。私たちの村では花饅を作る人々を「巧兒」と呼び、手指の器用さを指します」²³⁾と説明した。新絳県旅行局の白氏は「花饅は地元の家女性の女性たちによって生み出され、製作されたものであり、今でも新絳県や山西南部の住民にとって、年中行事や結婚、葬儀などの慶事において不可欠な存在です」²⁴⁾と語っている。面塑の発明者は田舎の普通の家庭の女性であり、伝承者もその多くが田舎の普通の主婦である。農業を主な生業とする彼女たちは日常生活の中で、その地域の文化に根差した面塑を製作し、技術を継承しているのである。

V おわりに

本稿では、黄河流域における山西省河津市龍門村と新絳県の伝統的な小麦粉食品である面塑の制作技術とその特質の把握を試みた。調査・考察の結果、以下の知見を得た。

まず、面塑の制作のプロセスでは、単に小麦粉をこねるだけではなく、良質な小麦粉を選び、発酵時間・温度を調整するなど技術的な側面が観察される。また、道具などの身の回りのさまざまなモノ・コトを巧みに利用しており、職人はこうした手順まで考慮しながら試行錯誤を繰り返して独自のスタイルを確立している。

次に、面塑のモチーフについて。そのモチーフは自然から獲得したものであるが、同時にまた人間の生活とも深く結びついていることがわかった。こうした多様性こそが面塑の重要な特徴の一つと考えられる。

面塑職人のほとんどは女性である。彼女たちが自宅で家事をしながら小規模な手工饅の店を営んでいることが当該地域の特徴といえる。彼女たちは面塑を作ることにより、厳しい自然環境の中で生きるための食の知恵や技術を、次の世代に伝承しているといえよう。

当該地域では「何か行事があれば花饅が必要で、花饅があれば何か行事がある」ということわざが伝わっている。このように、面塑と人々の人生は密接に関連している。誕生・成長・結婚・長寿の祝い・葬式など重要な儀礼や行事、人間関係における助け合いとつきあいなどには不可欠なものである。

今後は、引き続き黄河流域における小麦粉食文化に関する情報や知識を収集し、伝統食における継承・革新の分析・解釈を試みる。また、文化継承の問題も検討が必要である。調査では師匠の高齢化、面塑職人の不足、洋風生活の浸透、急速かつ大きな変容が確認され、この文化の継承が危惧されており、引き続き調査が必要である。

付記

本研究は2010～13年度日本学術振興会科学研究費 基盤研究（A）「環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」、(課題番号 22242028 研究代表者：野間晴雄)の成果である。現地調査にあたって、河津市文化館、新絳県旅行局、山西省博物館の皆様、そして王文華氏をはじめ聞き取りにご協力いただいた方には大変お世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。

注

- 1) 「発酵した小麦粉で蒸した底が平らな丸いもの」をいう。(中國社會科學院語言研究所詞典編輯室 (1980). 『現代漢語小詞典』商務印書館, 362).
- 2) 「中國第一屆民間花饅藝術節在我市隆重開幕」『咸陽日報』(2009年2月7日第1版).
- 3) 「上海世博山西活動週開幕」『周口日報』(2010年5月20日第3版).
- 4) 「『齊魯糧油』品牌賦能, 山東花饅勢起「新國潮」」『齊魯晚報』(2022年3月2日第16版).
- 5) 安新鮮 (2010). 『晉城民間面塑』北京工芸美術出版社, 6.
- 6) 潘家懿・辛菊 (1996). 「山西晉南的饅文化字詞」. 『語文研究』(4).
- 7) 張道一 (2001). 『中國民間美術辭典』江蘇美術出版社, 333.
- 8) 郭彬艷 (2016). 「山西面塑文化」. 藝術品鑑, 123.
- 9) 河津志編纂委員會 (1989). 『河津志』山西省人民出版社, 382.
- 10) 新絳県志編纂委員會 (1997). 『新絳県志』陝西省人民出版社, 489.
- 11) 代県地方志編纂委員會 (1988). 『代県志』書目文獻出版社, 368.
- 12) 餘寶滋 (1968). 物産. 『聞喜縣志 卷5』(民國8年石印本). 台北成文出版社, 125.
- 13) 劉玉璣 (1976). 實業略. 『臨汾縣志 卷2』(民國22年鉛印本). 台北成文出版社, 202.
- 14) 錢埔總 (2018). 土産. 『襄陵縣志 卷12』(清光緒7年刻本). 台北成文出版社, 106.
- 15) 俞家驥 (1976). 物産略. 『臨晉縣志 卷3』(民國12年刊本). 台北成文出版社, 95.
- 16) 何榮 (1976). 輿地志・物産. 『萬泉縣志 卷1』(民國6年石印本). 台北成文出版社, 74.
- 17) 徐昭儉 (1976). 物産略. 『新絳縣志 卷3』(民國18年鉛印本). 台北成文出版社, 245.
- 18) 李廷芝主編 (1987). 『簡明中國烹飪辭典』山西省新華書店, 335.

- 19) 劉侗・於奕正 (1983). 『帝京景物略』北京古籍出版社, 69.
- 20) 2011年12月23日現地聞き取りによる。
- 21) 洪汝霖 (2005). 『天鎮縣志』(光緒16年刻版). 鳳凰出版社, 512.
- 22) 前掲9)
- 23) 現地聞き取り (2012年11月17日) による。
- 24) 現地聞き取り (2012年11月20日) による。

文献

日本語

- 阿部治平 (1993). 『黄色い大地悠久の村－黄土高原生活誌』青木書店.
- 丘桓興 (1989). 『中国の民俗をたずねて (陝北篇)』中国・人民中国雜誌社.
- 周星 (2011). 物与人: 饅頭作為祭品、礼品和芸術品. 國際常民文化研究機構編『國際シンポジウム報告書Ⅱ 文部科学省認定 共同研究拠点 國際常民文化研究機構 第2回國際シンポジウム“モノ”語り－民具・物質文化からみる人類文化－』國際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所, 169-183.
- 深尾葉子・栗原伸治・井口淳子 (2000). 『黄土高原の村－音・空間・社会－』古今書院.
- 馬涛涛 (2016). 『中国・陝西省の新粉細工の伝統と發展』金沢大学大学院人間社会環境研究科博士学位論文.

中国語

- 安新鮮 (2010). 『晉城民間面塑』北京工芸美術出版社.
- 段彤彤 (2020). 花饅習俗溯源及其變遷. 藝術與民俗, 63-67.
- 高慕飛 (2012). 山西夏縣婚俗面花之造型藝術. 美術教育研究, 34-35.
- 閔曉華 (2013). 十里不同型, 一塑亦深情－晉南與晉北地區民間面塑藝術特徵的比較分析. 裝飾, (2), 87-88.
- 唐家路 (1999). 民間面塑藝術的源流與技巧特質. 湖北美術學院學報, (2), 31-50.
- 邢福榮・李仁偉等 (2019). 山西省聞喜花饅的傳承及創新研究. 美與時代 (上), 24-26.
- 丁世良・趙放 (1989). 『中國地方志民俗資料彙編 華北卷』書目文獻出版社.

Characteristics of Wheat-based (Flour Food) Culture
and in the Yellow River Basin:
A Case Study of “Mian Su” in Shanxi Province

YU Ya*

Mian Su, a form of dough sculpture, has been closely intertwined with human dietary habits in the Yellow River Basin, and has been widely used for various purposes such as food, ceremonial occasions, offerings, and gifts since ancient times. Over the course of many years, the people of the Yellow River Basin have diversified, seeking spiritual solace through Mian Su and pursuing its artistic transformation. This study focuses on the Mian Su of Shanxi Province, aiming to extract its cultural characteristics and examine its creation and transformation processes.

Key words: Mian Su, Wheat-based (Flour Food) Culture, Food culture, Yellow River Basin, Shanxi Province

*Professor, Otemae University Faculty of Modern Social Studies E-mail : yuya@otemae.ac.jp